
魔法戦記リリカルなのはForce白き魔装竜

冥府の死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは Force白き魔装竜

【著者名】

N9155R

【作者名】

冥府の死神

【あらすじ】

「J.S事件」より6年後の世界平和に暮らして一人の少年はある日全てを失い、スバル・ナカジマによって孤独から救われた少年トーマと出会つ物語は此処から始まる。

キャラ紹介

レイヴン

年齢 17 歳

身長 165

髪の色 黒

体重 55

性格は優しく明るい性格

特技、家事全般、釣り、家庭料理、山登り
好きなもの、辛いもの、甘いもの、読書、

嫌いな物、怪談、苦い物

ステータス（なのはと Fate 風）

筋力 : C (A A A +)

魔力 : A A A

耐久 : B (S S +)

幸運 : B + (A A A)

俊敏 : B (S S)

() はバリアジャケットを展開した時
デバイス名前 フューラー

バリアジャケットはバーサークフューラーですね

近距離戦闘技能 : A A +

中距離戦闘技能 : S +

遠距離戦闘技能 : S +

空中戦闘技能 : A

陸上戰鬪技能 : A A

命中技能・能力 : A A +

回避技能・能力 : S +

空間把握能力 : A A A +

1話

とある田舎町

郵便局と思わしき場所で一人の少年が一通の手紙を出していった
シスター「はい・・・ミッドチルダ宛ての電信繪ハガキの送信ね。」

「？」「ういっス」

シスターの言葉に少年は答えた

黄土色の髪と青い瞳をした活発な少年である

「？」「送り先は港湾警備隊所属のスバル・ナカジマ、防災士長様の
元で間違いありませんね？」

念のために聞いてきた局員の言葉に少年は頷いた

シスター「それでは、最後にお名前の確認をします。」

シスターが最後の質問に出た

それに少年は応える

トーマ「俺はトーマ・トーマ・アヴィーナーールと言います。」

ステイード『自分はステイードと言います。』
ステイードが丁寧に言つ

シスター「旅行中?」

シスターが尋ねてくる。

トーマ「ハイ!」

トーマは「元気よく」言ひ。

シスター「いいわね。今日はどうぞ」「まで?」

トーマ「この先の鉱山遺跡で宝探しと」

ステイード「写真撮影を」

ステイードが一瞬光り言つ。

シスター「そう旅は一人旅かしら?」「シスターが尋ねてくる。

トーマ「ハイ!」

トーマは、元気よく言い外に出る。

前略スウちゃんお元気ですか?俺は一昨日からルヴェラの文化保護区に入りました。

ワガママ言つて許してもらつた。一人旅も

トーマ「ステイード到着は、夜になるかな?」

ステイードに尋ねる

ステイード「そうですねトーマ食料の準備は十分で?トーマに聞く

トーマ「当然!」
ステイードに言つ

保護区内は、次元通信が不自由なのであんまり連絡できませんが、

俺は元気でやっています（ステイードに襲撃わって勉強もさうとしゃります。）

約束通り旅行の間に世界を見て回って、自分の答えを見つけてます。

トーマ「夕方か」

トーマは赤い夕陽を見て呟く

ステイード「夕食をしますか？」

トーマに聞く

トーマ「ああ

トーマ達が夕食の準備をしていくと、草むらから声が聞こえた

？？？「いい匂いだ。久しぶりの、飯が食えるー。」
黒い短髪の青年が、草むらから出でて立つ。

？？？「相棒」

小さな妖精サイズの白い髪の少年が呆れた表情で立つ

？？？「主」

小さな妖精サイズの黒髪の少女が立つ

トーマ「あの貴方達は？」

草むらから出てきた青年達に聞く

？？？「（）飯喰わせてください。」

トーマ「立つ

トーマ「ここですけど。」

？？？「ありがとうございます。」
トーマに頭を下げ感謝する青年

」

1話（後書き）

こんな感じでいいのでしょうか、文章力ない自分がですが、これからもよろしくおねがいします。

キャラ紹介2

ユニゾンデバイスヴァルホーク
ゾイドのバスターイーグル擬人化

白髪の少年

性格は良くも悪くも熱血漢。直感的な判断力・決断力に優れている一方、細かいことを深く考えるのは苦手。

身長はリインフォース^{ツヴァイ}スエイと同じ

?好きなもの：友情、肉、犬、ゲーム

嫌いな物ネコ

ユニゾンデバイスシャード

黒髪の長髪の少女

ゾイドのシャドー擬人化

^{ツヴァイ}スエイと同じ

性格面倒見のよい性格でお人好しで、一度言い出したら聞かない。芯が強く、どれだけの悲しみに暮れても他人を慰め、前へ進むために笑顔を浮かべができる後少々口うるさい

特技、掃除、裁縫

好きなもの、甘いもの、可愛い物、猫、鳥

嫌いな物、怪談、虫

「『』駆走様！」

青年は両手を合わせて言つ。

「『』駆走様だぜ！…」

「『』駆走様です。」

二人も両手を合わせてトーマに言つ。

「トーマ、速い！…！」

この三人の食べる速度をみて驚愕する。

ステイード、「彼女に比的する見事な食べ方ですね。」

三人を見ていうステイード。

「…」「おいしい夕食を分けてくれて感謝します。」

黒髪の短髪の青年はトーマの手を両手で握手して言つ

「…」「一週間何も食べて無かつたから死ぬかと思つたぜ…」

小さな妖精サイズの白い髪の少年がトーマ達に言つ。

「トーマ、一週間も」

「…」「俺はユニー・ゾンデバイスの、ヴァルホークだ！」

「…」「私は同じユニー・ゾンデバイスのシャドーです。」

レイブン達はトーマに元気を紹介する

トーマ「俺はトーマ・トーマ・アヴァーノールと申します。」

ステイード「自分はステイードと申します。」
ステイードが丁寧に言つ

レイブン「トーマ良い名前ですね。」

トーマ「そうかな?」

シャドー「良い名前ですよ。」
シャドーは笑顔でトーマに言つ

トーマ「ありがとうございます。」

笑顔でシャドーに返す

シャドー「／＼／＼／＼」

なぜか顔が赤くなる

トーマ&レイブン「？？？」

不思議な顔をする一人

ヴァルホーク「鈍感だな。」

小さい声で言つ

ステイード「鈍感ですね。」

ヴァルホークの後ろで言つ

トーマ「片付け終了それじゃ此処でお別れだ、俺・・・向かう所が

あるから。」

焚火の火を消して道具を片付け目的適地に向かう準備をする。

ヴァルホーク「向かう所？」

トーマに聞く

トーマ「俺・・この先の鉱山遺跡に行くから、レイブン達とは此處でお別れだ。」

レイブン達に言つ

レイブン「偶然だね！トーマ僕達もこの先の鉱山遺跡に行く予定なんだ。」

トーマの言葉を聞いて言つ。

トーマ「そうなんだ。」

トーマは3人を見て言つ。

レイブン「トーマ一緒にいく人数が多い方が楽しいよ？」

シャドー「一人のり大勢で言つた方が楽しいですよ？」

トーマにいう

ヴァルホーク「大勢じゃないぞ www
笑いながら言つ

トーマ&レイブン「ハッハッ www

二人も笑い出しながら楽しそうな表情で一人は歩く

シャドー「笑わないでください！！」

シャドーはトーマとレイブンに頬を膨らませながら一人に言つ

トーマ&レイブン「ごめん」

二人はシャドー誤り

シャドー「良いですよ」

すぐに可愛らしい笑顔になり一人に言う
4人と一機のデバイスはそして、ルヴェラ鉱山遺跡に向かう。
そして少年トーマとある一人の少女の運命の出会い

2話（後書き）

次でリリイ出せる文章かなりグダグダですが次回もよろしくおねがいします。

数時間後

トーマ「おーせりと見えた。」

ステイード「お田畠でのルヴュラ鉱山遺跡ですね。」

トーマ「うそ」

トーマ達の目の前にはあちこちが崩壊した古い石柱と倒れている石柱そして岩間にまれた遺跡が見えた。

レイブン「でも、もう夜だね。」

空を見て囁く。

シャドウ「野営できる場所でも探ししましょう。」

トーマ達を見て囁く一人。

トーマ「だな。」

レイブン「だね。」

ステイード「ですね。」

ヴァルホーク「そうだな。」

トーマ達は頷く。

数分後遺跡から一瞬光が見えトーマがそれに気がつく

レイブン「どうしたよトーマっ。」

トーマに尋ねる。

トーマ「先客かな、今明かりが見えたよ。」

ステイード「こんなへんびな場所に?」

トーマに尋ねる。

レイブン「人の気配が確かに周りから感じるのは。
遺跡を見てトーマに言つ

ステイアード「どうしますトーマ?」

トーマ「様子を見てみようか。」

ステイアード「了解」

ヴァルホーク「じゃあ隠れる場所を探さないとな。」

トーマ達に言つ

シャドウ「あそこなら大丈夫だと思いますよ?」
遺跡付近に人が隠れそうな草むらがあり指を差す。

トーマ「じゃあそこに隠れよっか?」
レイブン達に言つ

レイブン達「了解!」

トーマ達は遺跡付近まで駆け下り草むらに隠れる。

其処には、銃器とアーマーをつけた武装した兵士達と科学者達が
大勢いた。

女性「機材とデータの搬出は終了です、後はマテリナルですが
女性は中年の男性に言つ。

中年の男性「廃棄処分だここに捨てていく。」

女性「献体はともかくとしてシコトロアザックもですか?」「女性は尋ねる。

中年の男性「出来損ない一基にいつまでも関つておれどよ。向こうでコイツの保有者を書き換えてなれば済む。」

中年の男性はケースに入れている黒い魔法書を皿で見て女性に囁く。

トーマ達はその状態を見て。

ステイアード「引越しにしては物騒ですね。」

トーマ「関わり合つて得はねーな。」

レイブン「そうだね。」

トーマ元囁く。

トーマ「このままいつそいつ・・・離れるか?」

トーマ達はその場から離れようとするトーマが突然膝を着へトーマの頭に声が聞こえてきた。

「痛いよ」

「苦しいよ」

「少女だった。」

ステイアード「トーマー?」

声をかける

レイブン「トーマー?」「

トーマの近くに行き声をかける。

「マーティででで・・・この声念誦・・・!?

トーマは激しい頭痛を我慢しながら「…」。
そしてじゅりくして痛みが治まる。

ステイーデ「私には何も聞こえませんでしたが
ステイーデは言つ

レイブン「…」

ヴァルホーク「…」
トーマがあの念話が聞こえていたとは。

「

念話でレイブンは言つ。

レイブン「…」
トーマを見て念話で言つ。

シャドウ「トーマをなまかかー！」

念話でレイブンは言つ。

レイブン「そのまさかだね。」

念話でシャドウ達に言つ

トーマ「あの奥…誰かが助けてつてつてるー…」
遺跡に指を刺して言つ

ステイーデ「トーマあなたまさかー！」

トーマ「助けてつて言つてる。」

遺跡をみて言つ。

ステイーデ「…」
ですがねただ貴方が怪我でもすると、

私が彼女に怒られますので」

トーマ「オーライ相棒づまくせるや」

シャドウ「トーマさん未来は残酷ですね。」

トーマを見て懸念で囁つ

レイブン「仕方ないよトーマは、Eの因子適合者なんだから、
その宿命からは逃れない。」

トーマを見て冷静に囁つ。

トーマ「レイブン達はどうだい？」

レイブンに尋ねる

レイブン「僕達も一緒に行くよ

トーマに囁つ

トーマ「それじゃ行こうか

そしてトーマ達は、田の前の入り口から中に入った。
中には武装の姿があった。

レイブン「どうする。」

レイブンに尋ねる。

レイブン「トーマ僕の後ろに立つてきてくれない？」

トーマ「ここに立つ。」

トーマ不思議そうな表情でレイブン

レイブン「シードレイブン&シャドウ」

レイブン「ハイ」

シャドウ「ハイ」

「シードレイブン」「シードシャドウ・イン...」

するとレイブンが着ていた服が黒色になる。

トーマ「どうすんな気?」

レイブンに尋ねる

レイブン「簡単だよステルスフィールド展開!」「幻術魔法 使い言つと魔法陣が現れトーマ達を包む。」

レイブン「これで大丈夫!」「…」

レイブンは言つ

トーマ「本当?」

尋ねる

レイブン「僕の後ろにこてきてくれないかな?」「歩きながら小さな声で言つ。」

トーマ「判つた」

言つと歩き出す一人は武装戦員の田の前を通るが誰も気づかなかつた。

ステイシー「…………凄いですね」

レイブンに言つ

レイブン「やうかな?」

そしてトーマ達は、誰にも見つからず気づかれず遺跡の奥に入つていく、最初はかなり古ぼけた遺跡の山で普通の遺跡と変わらない道であつたが中に入つていくとその雰囲気は、かなり変わり今ではトーマ達の周りはほぼ全体機械だけの道だった。そして、

その周りには専門家じゃないと恐らく判らない謎の液体の中で浮ぶ細胞が見えた。それは人の脳に似た細胞と臓器似ている細胞だと思える物が浮んでいた。

トーマ「つか……つか……研究施設……？」

ステイード「それもだいぶやばい方向の
周りを見て判断するステイード

レイブン「恐らく違法研究所だと思つよ。」

周りをみてトーマ達にいう

? ? ? 「痛いよ」

また少女の声がトーマに聞こえる。

トーマ「待つてて痛いのすぐに止めてあげるから。」

トーマは扉の前に立ち魔方陣を開いて手を扉の正面に向けて置くと

トーマ「……解け」

言つと

ゴウンという音がして扉が開く。

そして中に入ると其処には一人の美少女が壁に貼り付けにされていた。

この3人が出会い事で運命の歯車が動き出す。

3話（後書き）

次で単子本一話が終わる長いなそしてリリーの会話が書ける！－！文章かなりグダグダですが次回もよろしくおねがいします。

P.S追加「この小説面白いですかね？読者の皆さんに聞いてみたいと思います。

つまらないならつまらないて感想にかけてください
後脱字誤字がありましたら感想に書いてください
よろしくお願ひします！

そして中に入ると其処には一人の全裸の美少女が壁に張り付けにされていた。

トーマ「！？」

美少女を見てまた頭痛の痛みが先ほどのり強くなる。

トーマ「あつづ・・・つつ！」

トーマは膝をつき頭を右手で触る。

そして、突然警報が鳴り始める

中年の男性「侵入者！？」

中年の男性がモニターを見る。

女性「何者かがシユトロゼック4セツに接触ーそれにこれは女性はモニターの映像を見て驚愕な表情をする。

レイブン「気づかれたか」

レイブンは警報を聞いて言つ。

？？？「だめ、痛いよ、怖い、寂しいよ

少女は念話でトーマに言つ。

レイブン「・・・」

トーマを見ている。

女性「リアクトの反応！？」

女性はモニターの映像を見て言つ。

？？？「来ちゃだめ

少女は念話でトーマに警戒する。

トーマ「大丈夫・・・泣かないで」

トーマは痛みを堪えながら、立ち上がるが眼球が少し出血している
がすぐに止まる。

そして、少女の表情が明るくなると壁に亀裂が入り今にも壊れそう
になる。

トーマ「...」

トーマは少女の元に全力で走る。

レイブン「・・・・」

トーマを見ている。

トーマ「間に合えーー！」

トーマは少女所に辿り付き拘束具を外して少女をお姫様抱っこして走
りだす。

そして、壁がガラガラと壊れる音がして崩壊する。

レイブン「トーマーー！」

トーマに声を掛ける。

トーマ「てで・・・っ大丈夫っーー？」

トーマは全裸の少女をお姫様抱っこしている状態で尋ねる。

少女は不思議そうな表情をしている。

トーマ「ーーーー」

全裸の美少女を見てトーマの表情は赤くなる。

レイブン「ステイード急いで服を探して」
レイブンはステイードに言つ。

トーマ「き・・・着る物ステイードなんか服つ……」
慌てた表情でステイードに言つ。

ステイード「それらしきものならいい」「元気だよ。」
ステイードは服を差す。

シャドー「トーマさん彼女一回降りしてください。服は私が着させ
るので」

シャドーは服を持ちトーマに言つ。

トーマ「了解……」

トーマは美少女を地面に降りてしまはずべて後ろを向く。

シャドー「見ないでくださいね。」

シャドーはレイブン達に言つ

レイブン「見ないよシャドー」

シャドーに言つと後ろを向いて見ないよつこする。

ヴァルホーク「見るわけないだろ」

同じく後ろを向いてシャドーに言つ。

だが一人は思った。張り付けにされているとき、「元気だよ。」

もう美少女の胸を見ていると一人は赤くなりながら考えていた。

その頃モニターを見ていた研究員達はザワザワしていた。

中年の男性「失態だ。」

その映像をモニターで見ていた中年の男性は怒りの表情でモニターを見ていた。

中年の男「安置室を熱焼却処分！シユトロゼックと侵入者ごとだ！」

中年の男性は部下に命令を出す

警告、警告感性災害の危険発生これより熱焼却処理を行います。

突然トーマ達の場所に警報が鳴り始め出口が閉まり煙が放出される。

「焼却！？」

トーマは驚愕した表情で言つ

ステイード「困りましたね。熱いのは苦手です」
ステイードは困った声で言つ。

レイブン「証拠隠滅するつもりだね」

レイブンは、表情を変えてヴァルホークに念話で尋ねる。

ヴァルホーク「映像録画するぜ」

念話でレイブンに言つ。

レイブン「お願いするよ」ヴァルホーク
レイブンは、ヴァルホークに念話で言つ

ヴァルホーク「了解！」
言つと録画を始める。

レイブン「さてこの状況どうするか

レイブンは考へ始める。

近隣ブロックの職員は至急非難を

マーティン「手伝えステイーク！」

八九、ニヒル

テーマ達は語りとナローテクションを自分達の周囲に展開する。

レイブン「プロテクションでは無理だね」「プロテクションの中でレイブンはいつ

熱焼却処分は温度が800度以上の状態で焼く。それに引き換えプロテクションは500度から800度までしか防げない。

「カウント6・5」

「あのいきなり飛び込んで来た『んな』ことになりやつて本題だ！」

「でも大丈夫きっと助けるから」
トーマは少女に囁つ。

レイブン「デバイスを起動させれば助かるけど後ほどが大変だから今は無理だし此処はトーマとこの子を信じるしかないか」
レイブンはトーマと少女を見て言つ。

4
3
2
1

次の瞬間少女が動きトーマの腕を持ち

？？？「誓約」

少女が咳くとトーマの右腕に腕輪が現れる。そして次の瞬間トーマ達が居る場所にバリバリといつ音がなりドオオオンと言ひ爆発音と爆炎が襲い掛かる。

中年の男性「やつたか！？」

男性は映像モニターを見ている。

「プラズママーク正常作動！」

中年の男性「いかなる防御をしようと人間が生存することなど・・・馬鹿な生きているだと」
モニター 映像を見て言う

中年の男性「あれば完成したのなら...溶ける温度の中でも活動しうるつー！そういうものを！我々は作り出そうとしていた。」

レイブン「成功か」

トーマを見て咳く

シャドー「ですが」

トーマを見て言う

トーマ「E C D i v i d e C o d e 9 9 6 セットアップティバ

イド・ゼロ

トーマは大型拳銃に、大振りな銃剣を装着したような形状の銃を天井に向けて「なのは」のティバインスター並の魔力砲を発射する。

ドゴツと発射音がすると土壁と天井をディバインバスター並の魔力砲が打ち抜く

ステイークホルダーマに声をかける。

「アーマーんああれつー！」

スティード「大丈夫

好は
本著者
の書
籍

ステイードは尋ねる。

「あやこ、おまえがおつまみを買ってきた？」

黒い革履防護服に身を包み
髪と瞳の色が変化していた

レイブン「まさかゼロが撃てるとは」
レイブンはスマートを見て呟く

「ヤードマークは、アーチ橋の上にあります。」

「レイブン、『100%ゼロ因子適合者だね』って見て陔ぐ。

? ? ? 「？」

少女はトーマをじっと不思議そうな表情で見ていた。

アーティスト・アート

突然銃が光だしそして消えて右腕に腕輪が装着される。

トーマは腕輪を見てじょくへじて少女を見る。

トーマ「ああ、めで大丈夫？俺トーマ・アヴェール名前聞いても？」

トーマは少女に尋ねる。

「？」リリイです。リリイ・シユロロゼック

少女リリイはトーマに囁く。

「トーマ」リリイといねかわっこな前だ

リリイ「…」「

リリイは泣ながらトーマに抱きつ。

トーマ「と、とつあえず安全な場所まで出まつ！ステイード周辺チック！」

トーマはリリイの肩に両手を置いてレイブン達とステイードに囁く

レイブン「そりだね

笑顔でトーマに囁く。

ステイード「オーライトーム

トーマ

同時刻第12管理世界・フェティキア港

シャーリー「お疲れさまです。フェイトさんティアナ執務官押収物には該当しそうな品あつませんでした。」

シャーリーはフェイトとティアナに報告する。

フェイト「そう銀十字もトイバイダーも」「じやなかつたか？」

フロイトはシャーリーを見て呟く。

ティアナ「Hクリップス」の感染者を出すわけにはいきません。」「
ティアナはフロイトに向かう。

フロイト「うん」

ティアナ「もしも感染者が出たのならなんとしても捕獲しない」と
ティアナは言つ。

4話（後書き）

誤字とかありましたらお手数ですがお願いします。

管理世界の技術や文化のレベルは、世界な国によつてわざわまである。

第1世界ニッヂルダのような先進都市もあれば、人と自然がともに暮らす辺境世界もある。

此処第23管理世界ルヴュラの文化保護区も、また古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区。

移動も通信も極めて不自由ながら、都会を忘れ豊かな自然と過ごせる土地

第23管理世界ルヴュラの夜山の中

トーマ達は焚火をしている。

レイブン「トーマ交替だよ」

黒い短髪の青年はトーマに笑顔で言つ。

トーマ「まだ大丈夫だよレイブン」

トーマと呼ばれた少年はレイブンに言つ。

レイブン「トーマはもう少し睡眠しないと駄目だよ」

レイブンは折れた枝を火に入れている。

トーマ「大丈夫だよ」

同じく左腕で枝を入れながらレイブンに返答する。

レイブン「今日は大変だったんだから、トーマは休まないと行けないよ」

トーマ「本当に大丈夫だよ」

トーマは一瞬目眩がするが気にしないでレイブンに向づく。

シャーデー「トーマさん絶対少し寝た方がいいです」

シエニはエイを見て心配した表情で言ふ

「いざ。」
ヴァルホーク「シャドーとレイブンの言つとおりだ少し寝た方がいい

ヴァルホークはトーマを見て呻き出す。

トーマーは、本当に大丈夫だから心配しないでよ」とトーマはレイブン達に言う。

「無理している奴はいつもそ言つ大丈夫だと」
アルホークは鋭い眼光でトーマを見て言つ。

卷之三

シャドーマーティを見ながらいつと水をマーティ渡す。

トーマ「大丈夫だから・・・何か急に眠たくなつてきた」
水を飲みながら言うがトーマは凄い眠気に襲われる。

レイブン「トーマもう寝た方がいいよ明日も速いんだから」
レイブンは水を飲みながらトーマに向かう。

「ジヤウホウセイハシテハ、アーティストの才能を發揮するには、先に開拓して貰つ

アーティストとしての木の所に坐り寝始める。

レイブン「お休みテーマ」

トーマ「お休み」

トーマはレイブンに言ひと静かに眠り始める。

それから数時間

トーマ達が寝ている場所には、レイブン達が居ないくて周りに音を遮断する結界が張られていた。

かなり離れた場所の森の中には、大量の小型のヒョウ型とゴリラ型とカマキリ型その数合計で30機の機械が、背部に回転して切り裂く爪が特徴の白いティラノサウルスの機械と戦っていた。

小型のヒョウ型「・・・」

背部のビーム砲を白いティラノサウルスに向けて一斉にビームの弾丸を放つ。

小型ゴリラ型「・・・攻撃開始」

左肩のビーム砲と右肩のミサイルを白いティラノサウルスに向けて一斉に発射する。

小型のカマキリ型「・・・」

背中のガトリング砲を白いティラノサウルスに向けて撃ちまくる。

その攻撃を回避せずに背部に回転して切り裂く爪から薄い紫色の何かを開して、

攻撃を全て受ける白いティラノサウルス。

白いティラノサウルス「AN185mmビームキャノンだけで十分だな」

白いティラノサウルスは背部に回転して切り裂く爪の基部から、

「なのは」のディバインバスター並のビームを小型のヒョウ型と小型ゴリラ型に向けて放つ。

ド「オオオオオオオン！！

ビームを小型のヒョウ型と小型ゴリラ型に当ると辺りに激しい爆音が周囲に響く。

小型のヒョウ型と小型ゴリラ型が居た場所には巨大な爆発後が残っていた。

小型のヒョウ型と小型ゴリラ型の生き残り達がミサイルとビームで反撃しているが、

白いティラノサウルスのビームのほうが火力が勝っているために全て飲み込まれ。

ド「オオオオオオオオン！！」といつ爆発音が聞こえ小型のヒョウ型と小型ゴリラ型が全滅する。

一体のカマキリ型は背後から奇襲カマで、白いティラノサウルスに襲いかかるうとするが、

その奇襲に気づき襲いかかるうとしたカマキリ型を、白いティラノサウルスは尻尾で、

カマキリ型を吹き飛ばす。

吹き飛ばされたカマキリ型は吹き飛ばされ。6本木が倒れた場所で機能停止する。

白いティラノサウルス「終わりだ」

森の中に隠れている。カマキリ型を発見して頭部から尾部までが一直線になり、尾部の放熱フインを展開し脚部のアンカーを下ろして白いティラノサウルスは言づ。

カマキリ型は最後の悪あがきで、背中のガトリング砲を白いティラ

ノサウルスに向けて撃ちまくるが。

背部に回転して切り裂く爪から、薄い紫色の何かを展開して攻撃を無効化していると、

白いティラノサウルス口部に黄色いエネルギーが集まりそれを口部から発射すると、

強力な黄色いエネルギーの砲撃が、カマキリ型に当たるとカマキリ型貫通して、

ドゴオオオオオと爆発音が周りに響きカマキリ型は全機溶解していった。

ヴァルホーク「派手になつたな」

ヴァルホークは白いティラノサウルスに近づいて言つて

白いティラノサウルス「ヴァルホーク結界は大丈夫?」

白いティラノサウルスはヴァルホークに尋ねる。

ヴァルホーク「最低出力の集束荷電粒子砲だから、結界は大丈夫だぜ」
ヴァルホークは白いティラノサウルスに言つて

白いティラノサウルス「トーマ達の方には?」

白いティラノサウルスはヴァルホークに聞く。

ヴァルホーク「シャドーに先ほど聞いたけど音は聞こえていないだつてよ」

ヴァルホークは白いティラノサウルスに返す。

白いティラノサウルス「よかつた」

白いティラノサウルスは消えて黒い短髪の少年に戻る。

ヴァルホーク「しかし、連中今度はトーマ達を狙っているな
ヴァルホークは真剣な表情で黒い短髪の少年レイブンに尋ねる。

レイブン「トーマは、因子適合者^{リドロバード}は珍しいからな。
彼らにとつては欲しい一つなんだよ」

歩きながらレイブンは、ヴァルホークに言つ。

「ヴァルホーク、連中普通に禁法研究とかしてこらへん。

ヴァルホークは返答する

レイブン「最近はあそこもあつてできなーいしね。トーマ達を護る
のが厳しいね」
ヴァルホーク「そうだな」
レイブン達は溜め息をしながらトーマ達の場所に戻る。

5話（後書き）

2か月掛りました相変わらずの駄目作者なりに頑張って見ました誤字、脱字、読みにくい所ありましたら感想によろしくお願いしますまた小型のヒョウ型とカマキリ型とゴリア型、分かった人が居ましたら凄いですね

では次回もよろしくお願いします。

ソイド紹介（前書き）

メッセージで書いてくださいと書かれたので書きます

バーサークフューラー

方大陸戦争期にニクシィ基地にてライガーゼロの兄弟機として開発された鉄竜騎兵団の旗艦ゾイド（アイゼンドラゴン）で、外見はジェノザウラーに類似している。ライガーゼロと同じコンセプトで開発されており、ティラノサウルス型の完全野生体をベースとした事で、オーガノイドシステム搭載型ゾイドに匹敵するパワーを手に入れている。計算上の総合力はジェノブレイカーをも凌ぐと言われ、更に操縦性が極めて悪いジェノブレイカーよりも扱いやすい機体となっている。

後に開発されたヘリック共和国軍の凱龍輝にも本機と同種の素体が流用され、ガイロス帝国軍の型番EZ-049の他に「BF-02」のナンバーがあるが、これはバーサークフューラー-02と言う意味（01は兄弟機のライガーゼロにつけられるはずだったが、共和国に奪取された故に、ライガーゼロイクス登場後も付けられなかつた）。

本機種の最大の武器は、ジェノザウラー系統から受け継がれ、さらに高出力で口腔内に装備された荷電粒子砲と、背部に一基装備された「バスタークロー」である。荷電粒子砲は集束式と拡散式の切り替えが可能になっている。

武装解説にはないがアニメやゲームでは、荷電粒子砲と同時に背部のバスタークロー基部のAZ185mmビームキャノンの出力を口腔内に装備した荷電粒子砲並にまで高めて発射でき、荷電粒子砲も含めた三個の高出力ビームの同時発射の威力は絶大だが、機体固定アンカー使用時でも、後退してしまえば反動は大きい。

所属 ガイロス帝国

ネオゼネバス帝国

バツクドラフト団／チーム・ベガ（スラッシュ・ゼロ）

チーム・サベージハンマー（フューザーズ）

分類 テイラノサウルス型

全長 22.7m

全高 12.3m

重量 127.0t

最高速度 340.0km/h

武装装備

荷電粒子砲 × 1

エレクトロンファン

ストライクレー・ザークロー × 2（前脚）

ストライククロー × 2（後脚）

アンカー × 2（後脚）

ストライクスマッシュテイル × 1

荷電粒子ジェネレーター × 3（尾部）

イオンブースターパック（背部）

バスタークロー（マグネザー／Eシールド／AZ185mmビームキヤノン） × 2（背部側面外側）

ハイマニユーバスラスター × 2（背部側面内側）

バニニアスラスター × 10

ハンマーロック

中央大陸戦争時代、ゼネバス帝国軍が開発したゴリラ型汎用歩兵ゾイド。アイアンコンングの小型版と言うべきゾイドであり、格闘能力が高い。

バトルストーリー1巻でゼネバス帝国のスペイコマンド・エコー中佐が、ウルトラザウルスを奪取する作戦で使用したエピソードが高い。

名。

ZAC2056年の惑星Z-i大異変後も生き残り、第一次大陸間戦争ではガイロス帝国軍の機体として第一線に復帰することとなつた。しかし、ハンマーロックの能力の高さに目を付けた帝国摂政ギュンター・プロイツェン元帥の策謀によってガイロス帝国の正規軍である国防軍には回されず、彼の私兵集団であるプロイツェン騎士団（通称PK師団）にのみ配備された。ネオゼネバス帝国成立後は強襲戦闘隊に配備され、主力ゾイドの一つとして使用されている。

現行機には力スタマイズパートとしてCP-26 全方位ミサイルユニットが用意されており、これを装備することで空陸を問わない攻撃が可能となる。この仕様の呼称は特に定められていない。

なお、旧仕様機の「クピットは単独での飛行が可能であつたが、現行機にその機能が存在するかは不明。

属 ゼネバス帝国（旧）
ネオゼネバス帝国（旧）

分類	ゴリラ型
全長	5.6m
全高	6.7m
全幅	5.9m
重量	26.8t
最高速度	180.0km/h
武装装備	ハンマーナックル×2 誘導対空ミサイル×4 連装ビーム砲×1 バルカン砲パック×1

ヘルキヤット

中央大陸戦争中期、ゼネバス帝国軍が開発したヒョウ型（ジャガーモードと呼ぶ場合もあった）高速戦闘ゾイド。ヘリック共和国軍のRM-Z-12 ガイサックに多大な損害を受け、奇襲戦の重要性を学んだことから誕生した。

元祖ステルスゾイドであると同時に、高速機の草分けでもある。砂漠戦を得意とするガイサックに対し、ヘルキヤットは森林や山岳での奇襲戦を想定して設計された。特に脚部に施された消音機能とぎりぎりまで熱放射を抑えた排気システムは秀逸で、これにより敵に気付かれず接近できるため「密林の暗殺者」という異名を持つ。この技術は後にEPN-003 サーベルタイガーに活用された。

ZAC2056年の惑星Z-i大異変後も生き残り、第一次大陸間戦争ではガイロス帝国軍によつて運用が続けられた。EZ-016 セイバー・タイガーとペアを組み高速部隊の主力となつたが、基本設計の古さが目立ち、ヘリック共和国軍のRZ-009 コマンドウェルフにまったく太刀打ちできないため、EZ-035 ライトニングサイクスが開発されることとなつた。

旧仕様機のコクピットは単独での飛行が可能であつたが、現行機にその機能が存在するかは不明。

なお、ヘルキヤットが光学迷彩の機能を持つとする描写は、アニメ『ゾイド -NOIDS-』が初出である。ゾイドバトルストーリー内においては、ゾイド公式ファンブック4巻でのEZ-054 ライガーゼロイクスと比較する記述で、初めて光学迷彩機能を持つことが明確にされた。

所属 ゼネバス帝国
ガイロス帝国

分類 ヒョウ型

ロールアウト ZAC2034年

全長 13.2m

全高 5m

全幅 3.8m

重量 24.0t

最高速度 190km/h

武装装備 小口径2連装レーザー機銃（胸部）

対ゾイド20mm2連装ビーム砲（背部）

複合センサーコニット（背部前方）

3Dレーダーアンテナ（尾部）

ディマンティス

鉄竜騎兵団^{アイゼンドラグーン}が極秘裏に開発したカマキリ型SSゾイド。ホバーリングによる長距離高速飛行で神出鬼没に行動し、集団で襲いかかる。前脚のハイパー・アルクスは、大型ゾイドをも倒す威力を誇る。背面に装備されたガトリングには砲座が設置されており全方位死角がない他、小型機ながら戦場に人員を運搬する役目を果たしている。また、ディマンティス同士で連結し大型機に合体することも可能。

アニメ『ゾイド新世紀スラッシュ・ゼロ』ではバックドラフト団所属機が多数登場する。

所属 ネオゼネバス帝国

バックドラフト団^{スラッシュ・ゼロ}

分類 カマキリ型

全長 6.48m

全高 7.2m

重量 10.0t

最高速度 370.0km/h

武装

2連装バルカン砲 × 2
ハイパー・ファルクス × 2
マルチアンテナ × 2
ガトリング砲座 × 2
イオンブースター × 2

管理世界の技術や文化のレベルは、世界な国によつてそれまである。

第一世界ニシードチルダのような先進都市もあれば、人と自然がともに暮らす辺境世界もある。

此処第23管理世界ルヴァニアの文化保護区も、また古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区。

移動も通信も極めて不自由ながら、都会を忘れ豊かな自然と過ごせる土地

山の中朝

トーマ「うおおおーやつた街が見えたーー」

トーマは高い岩場から元気よく叫ぶ。

レイブン「トーマは・・・元気だね」

腹の音を鳴らしながら空腹顔でレイブンは叫ぶ。

ヴァルホーク「元気・・・・・」

シャドー「過ぎですね」

二人は同時に叫ぶ。

トーマ「ほりやまた絶景！」

ステイード「記念写真でもとりますか？」

ステイードはトーマに尋ねる。

トーマ「お願ひするよ」

トーマが叫ぶ。

ステイード「了解」

ステイードは言いつと周つの自然の景色と街と海の写真を取り始める。

トーマ「モーいえ、ぱりリリイ大丈夫？疲れていない？」
トーマは背中に乗せているリリイに尋ねる。

リリイ「大丈夫」

リリイはトーマに返答する。

レイブン「僕達は大丈夫じゃなによ」

腹の音を鳴らしながら空腹顔でレイブンはトーマに向かう。

トーマ「街に着いたらもう少し休憩をして何か食べようか」

レイブン「賛成！」

ヴァルホーク「賛成！..！」

シャドー「賛成です！」

3人は片腕を上げてトーマに向かう。

リリイ「つさトーマ」

リリイは可愛らじこ微笑みでトーマに向かう。

ステイアード「こじはは海産物が美味しいよう焼き魚に魚介のスープ」

トーマ「やめろ～腹が減る～」

トーマ『リリイはあれからよく眠つて寝ついている間に少し泣いていた。

あんな場所に捕まつてたんだから、辛いこともあつたんだろう。』

トーマは背中にリリイを乗せて考え方しながら歩く。

トーマ『正直な所この妙な腕輪の』とか、あの時の『とか』聞きたいことは、

色々あるんだけどまずは安全な場所にたどりついて、それからスウちゃんに連絡と相談をつてことで、地方警防じゅロクな対応もしてくれねーだろうしな』

トーマは考えることをやめてリリイを見て。

トーマ「それにしても腹減った。リリイーちょっと揺れるナビ走っていい?』

尋ねる。

リリイ「うとう」と

リリイは問題ないらし笑顔で言つ。

トーマ「せんじゅだーーーッショウ」
トーマは走り出す。

「トーマ早!』

「トーマ待つてよ!』

シャドー「トーマせん待つてくだせーーー!』

走り出したトーマに向いて行く3人。

6話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

第18管理外世界イスター
その場所は自然に恵まれて川も綺麗で何処にでもある平和な世界だが、今日は少し違うようだ。

何処かの村に巨大な爆発と倒壊した木の家が目立ち周りには警察と管理局の局員達が沢山いた。

局員達は人を運んで人を袋の中に入れていた。

村人の女性「たつた一人だつたよ。男と女の二人組あの二人がこの村を、

この土地の皆を本当にあつといつ間に・・・」

左目と額をぐるぐる巻きにされ子供を抱きか抱えた女性は説明する。

ティアナ「犯人はいつたいどうやつてこんな破壊を?」

ティアナは村人の女性に尋ねる。

村人の女性「男の方は奇妙な銃を持つて・女は黒い本を――
左目と額をぐるぐる巻きにされ子供を抱きか抱えた女性はティアナ
に伝える。

ティアナ「それはこんな・・・?」

ティアナ服から黒い本と銃剣が写っている2枚の写真を見せて女性に
聞く。

村人の女性「それ・・・!刀が付いているその銃!」

女性は写真を見て怯え子供も目を瞑りガクガク震えていた。
子供の目は完全にその写真に写っている物のせいで、恐怖を思い出
たようだ。

管理局の局員「間違いないですね執務管」
局員の男性は近くでティアナに聞く。

ティアナ「はい九分九厘エクリプス保有者の仕業です。」
ティアナは考えながら言つ。

管理局の女性局員「やはり例のフックバインとかいう組織が・・・？」

管理局の女性局員が尋ねる。

ティアナは「これからその調査をしようと思ひます。生存者の捜索の方・・・よろしくお願ひします」

ティアナは局員達を見て真剣な表情で伝える。

管理局の局員「ハイ」

同時刻第3世界ヴァイゼン首都海上橋

シャーリー「ティアナはもう現地入りしている頃ですかね・・・？」
シャーリーは車を運転しているフェイトに聞く。

フェイト「そうだね。もう調査を始めている頃かも」
フェイトはシャーリーに運転しながら返す。

シャーリー「広域捜査は私達がヴァイゼンからティアナがイスタから、
であるお二人がルヴォラの方に」
シャーリーはノートパソコンを打ちながらフェイトに尋ねる。
フェイト「うん」

フロイトは頷く。

「各地の捜査隊が動いてくれていますが、やっぱり手は足りませんねえ」

ノートパソコンを閉じてフロイトに聞く。

「手配はしてあるよ大丈夫後は、向こうが早めに動きだしてくれるとこにんだけど」

フロイトは呟く。

同時刻第一世界ミッドチルダ海上

周りはカモメの鳴き声と海の音が聞こえ、広い海上中に浮かんでいる戦艦、

L5級艦船ヴォルフラム の「カウンカウン」と鳴る音しか聞こえない。

L5級艦船ヴォルフラム の捜査司令執務室

「？」「司令そろそろ記者会見に、出かけるお時間ですよ。」

青髪の見た目が中学生の少女が茶髪の女性ハ神はやてに教える。

はやて「うん」

はやはは後ろを振り向かないで返事を返す。

「？」「現状の担当案件も、この解決発表で最後です、これでやつと動けますね」

青髪の見た目が中学生の少女がはやてに教える。

はやて「そやね。おおきになりイン色々よ 頑張ってくれたなはやは青髪の見た目が中学生の少女リインを褒める。

リイン「とんでもないです」

リインは微笑んで言ひ。

はやて「ほんなら行こうか、皆を待たせたらあかんしな
はやては歩き出しリインに伝える。

リイン「はいですっ」

手にボードを持ちながらリインは言ひ。

第23管理世界ル、ヴェラ北部港町数時間後

ト マ「すいません貝の焼き串5人分といこいら辺りで次元通信はありますか？」

ト マは貝焼き串を焼いている町人のおばちゃんに尋ねる。

町人のおばちゃん「次元通信？そんなハイカラなもんはこいらこ
やないねえ」

町人のおばちゃんが貝の焼き串を焼きながらト マに返答する。

ト マ「あーやつはそーですか」

貝の焼き串を見ながらト マは言ひ。

町人のおばちゃん「次元越えの郵便や電報を出したいんなら、
山の向こうの教会で送れるよ。」

町人のおばちゃんはト マに優しく教える。

ト マ「あ・・それは知っています。行きに出してきましたから。」

ト マは町人のおばちゃん伝える。

町人のおばちゃん「はい貝の焼き串おまたせ早めに食べるんだよ
町人のおばちゃんはト マによく焼けた貝の焼き串を渡す。

ト マ「ありがとうございます。」

ト マは町人のおばちゃんから渡された焼けた貝の焼き串を受け取
り、

町人のおばちゃんに感謝して歩き始める。

ステイード「予想通りでしたね」
ステイードはト マに向かう。

ト マ「まーな

歩きながら返答する。

ト マ「とつあべずリリイの服と靴を買つて教会までは歩いてもら
うか」

ト マはステイードに歩きながら囁く。

ステイード「ですね
ステイードは頷く。

数分後ト マ達は広い広場に出て噴水の近くに座つてこるリリイと
レイブン達を見つける。

ト マ「リリイとレイブンおまたせ」

ト マは言つと町人のおばちゃんから渡された貝の焼き串をリリイ
とレイブン達に渡す。

レイブン「貝の焼き串美味いよ

ヴァルホーク「貝の焼き串最高ーー！」

凄い速さで貝の焼き串の具が減つていぐ。

シャドー「美味しいですねリリイさん」

リリイー
? ?

ララバジン一也おいか食べてこる。

ト マ「休憩宿はそこいらにあるけど服屋はあるかな?」

トマイは眞の焼物串を食へながらアーティストになれる

スティーブ「それでした、あの男の一人が、田中湯の井です。

市場の方に向いててアマに教える。

ノルマニカノスルノリハシテノ

トマはリリイを見て聞く。

הנִּמְלָאָה

レイブン「僕たちが宿取つておへからゆつへじ服選んでくればア

アコモドマードアに終り食い終わる

シャドー「服選びは私に任せてくれださい。」

「わかったよシガレターペーパーを選びながら、マジシャンを見て貰おう。

そしてそれから数分後一旦別れることにした。

7話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

第23管理世界ルヴォラ北部港町自由市場

トーマ「おおけつこういろいろあるもんだ。」

トーマはリリイを背中に乗せている状態で自由市場の周りを全体的に見ていく。

シャドー「良いお店が沢山ありますね」「全体の店を見ながらトーマに伝える。

トーマ「でも人が多いからこれは服屋探すよ大変だな」

トーマは周りを見てシャドーに言ひ出す。

シャドー「其処は私の出番です!」

トーマ「言ひとシャドーは小さくなり妖精サイズに変化させて、自由市場の中に入つて行く。

シャドー「中々安い服で可愛い服が見つかりませんね」

空を飛びながら色々な市場を見て回ると黒髪の少女の市場を見つけて値段と服を見て行くと。

濃い紫の髪の少女の所を見ると服と値段を他と比べて安いと確認して

シャドー「トーマさん見つかりましたよ……」

妖精サイズのままトーマに向えに行く。

トーマ「見つかった?」

トーマはシャドーに尋ねる。

シャドー「ハイ良いお店が見つかりました

トーマを見て言つと案内を始める。

？？？「はいいらつしゃ～い素敵な衣装にアクセサリー～」

シャーダーは濃い紫の髪の少女を指してトーマに教える。

？？？「おー、セレの仲良しちゃん 良い服あるよ見てつて～

トーマ「えーとねこの子の靴と服を探しているんだけど・・・」

る。

「ほこせー。服と靴サイズはどう?」

卷之三

マサニイ始める

? ? ? 「……ふむんじや まづはサイズ測るつか！」

トーマは焦る表情でリリイを見ていた。

濃い紫の髪の少女はメジャーを出してトーマに尋ねる。

「よかつたらヘアカジトもやつていこるよ。服買ってくれたら
特別サービス」

シャドー「それじゃお願ひします」

妖精サイズのシャドーがトーマの代わりに叫んでいた。

「あ、どうねお姫さん彼女降ろしてね。」
濃い紫の髪の少女はトーマに叫び近く椅子を置く。

トーマ「わかった

トーマは背中に乗せていたリリィを椅子に座らして降ろす。
数十分後トーマ達は後ろを向いていた。

トーマ「はい完成・・・ビーオーお~すきりしたと思うんだが」「
濃い紫の髪の少女はリリィの髪の毛を少し切ってリリィに尋ねる。
リリィ「凄いそつぱりした」

リリィはトーマを見て呟く。

シャドー「髪切る上手ですね」

シャドーは濃い紫の髪の少女に向かいつ

「? ? ? 「それほどでもないよ」

濃い紫の髪の少女はシャドーを見て返答する。

トーマ「気に入つたつて」

トーマは少女を見て教える。

「? ? ? 「イヒイ」

少女は拳をグーこしたまま喜んでいた。

「? ? ? 「んで、このやつをアーティセラムの服も
よいかわいいでしょ?」

濃い紫の髪の少女はトーマ達に聞く。

シャドー「可愛いですリリイさん！」

シャドーはリリイの周りをクルクル回りながら囁つ。

トーマ「あー可愛い可愛い

パチパチ両手を合わせてリリイを見て言つ。

???「気に入つて貰えたら嬉しいなー

少女は靴を持つてきて微笑んで楽しそうに言つ。

トーマ「んじゃお代だけどいの?こんな安くつて

トーマは濃い紫の髪の少女に質問する。

???「まーあたしが、趣味で作ったものだし
少女は小銭を入れの箱を出してトーマに返答す。

トーマ「趣味のわりには、随分上手だけビ…」

トーマはポケットから財布を出して少女に尋ねる。
その時に右腕の純銀をみた少女はの頭の中で、キュピーンといつ、
何処かの某野球ゲームの主人公の音が響いた。

???「わあ！綺麗なリング！これ純銀？」

濃い紫の髪の少女はトーマの右腕を見て尋ねる。

トーマ「！」

トーマは顔から少し汗が出る。

???「彼女もつけてるよ。一人でお揃い？

少女はトーマに質問する。

トーマ「あー」

困った表情で少女を見ている。

シャドー「やうなんです一人でお揃いにしているんです
シャドーは少女に説明するが。

??.??.? 「ん? ロンつなぎ田はないけど、ビーやつて外すの?..

濃い紫の髪の少女はトーマに尋ねる。

トーマ『やばい』

シャドー『やばいでや』

二人は同時に思った。

トーマ「ま…まあその内緒! はいこれお代ね
トーマは少女に小銭を渡す。

??.??.? 「お…えーなんか訳あり? 力になれる」とがあつたら . . .
. . .え、

おおっ! …ちよつとおつりおつり――――!

少女はお釣りを渡そうとしたがトーマ達が走つて逃げたため渡せなかつた。

トーマ「あんがと服屋さん! 縁があつたらまた!」

トーマは手を振りながら濃い紫の髪の少女を振り向いて言つ。

??.??.? 「どーいたしまして」

少女は微笑んで言つ。

8話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

夕方16時50分頃

レイブン「ふむ」

宿代を見てみた。

ヴァルホーク「此処が一番安いな
値段を見て言ひ。

レイブン「此処で止まつつかすいません」

レイブンは休息宿の店舗を呼んで宿の予約をする。
一通りの手続きが完了して一人は宿の場所で座つてこるとトーマ達
が歩いてくる。

トーマ「宿良い所取れたんだね」

レイブン「値段と部屋も良一からね」

トーマは座つてこるレイブン達に微笑む。

トーマを見て教える。

トーマ「中に入らつか」

トーマはレイブンを見て言ひ。

レイブン「やうだね

レイブン達は言つて宿の中の自分の部屋に向かって、自分達の部屋に着くとドアを開ける。中は少し普通の宿のつぶやこのふさがある。人ベッドが三つあつてテレビも付いていた。

トーマ「本当に良くて部屋だわ」

トーマは部屋の周りを見て回る。

ヴァルホーク「向せ俺達が見て良くて部屋だと困ったんだから当たつ前だろ?」

トーマ「やうなんだ

トーマはヴァルホークを見て回る。

ヴァルホーク「とつあえず此処で一休みして明け方協会に行こう。

トーマ達に答える。

リリイ「うさ

トーマ「やうだね

トーマ達はマードへ踏み出る。

トーマ「やうと落ち着ける。」

トーマ「やうと落ち着ける。」

リリイ「トーマ達は凄いね。いろいろなことが知っている」「

ベジドに座つてこむ状態でトーマとレイブン達を見て言つ。

トーマ「まあ俺ずっとたび暮らしだから

トーマはリリイに説明する。

リリイ「ずっと..」

リリイは尋ねる。

トーマ「今回の旅はけっこつめ行つた先でバイトしたり、
発掘品を卖つたりとかしながらね

トーマは布団の上に座つてリリイに教える。

レイブン「僕達は3人で旅とこいつの迷子だけだね」

レイブンはソロモンに話す。

リリイ「どうなんだ」

リリイはトーマ達を見て言つ。

リリイ「トーマはずっと一人?」

リリイはトーマに聞く。

「トーマ」帰る所はあるよ。今は探し物を兼ねた一人旅なだけ

トーマはリリイに教える。

リリイ「探し物?」

リリイは尋ねる。

トーマ「んまあ、いろいろ見つかればいいけど見つかったとしても、それを俺がどうするか、まだわからないかな。

まあその程度の気楽な旅行つー所かな

「リリイ、トーマとレイブン達はめんねあらがと」

「リリイ、トーマとレイブン達はめんねあらがと」

リリイは突然謝り。

トーマは赤面してレイブン達は慌てる。

リリイ「旅行中だったのに助けてくれて、

「トーマ」あわせちがつたのに優しくしてくれて

リリイは申し訳なさそうな表情でトーマ達は慌てる。

「トーマ」あー平氣一、俺の勝手でやつたことだじー。

トーマは慌てて手を振りながらリリイに謝る。

レイブン「怖くなかったよ。たまにあんな事件に巻き込まれている

から、

僕達は！」

レイブンも慌ててリリイに向かう。

シャドー「私達は気にしてませんよリリイちゃん！」

シャドーもリリイに伝える。

トーマ「俺もね昔優しい人に助けてもらつたんだ。
だからいいんだリリイが痛かつたり、悲しかつたり、しないんなら
それが一番！」

トーマは親指をリリイに見せて伝える。

リリイ「うんありますよ！」

リリイも納得して微笑んでくれた。

シャドー「なんとかやつました・・・」

シャドーは安心した表情で囁く。

9話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願ひします。

PS30文字で、するとなぜか最初はいいですが後から、なんか微妙な所に付くんですのね・・・なんでだろう

1-0話（前書き）

今日は物語の話が主にです

夜方00時00分頃

夜空の中一つの部屋で男女は睡眠していた。

レイブン「皆気持ちよきがて寝ているね」

トーマ達の寝顔を見ながらレイブンは相棒の白銀のデバイスを触りながら言つ。

「？？？」今日の夜の空も綺麗だなレイブン

白銀のデバイスはレイブンに言つ。

「そうだね静かで良い月が出ているね。… あの人居なかつたら、僕は此処に居なかつただろうね。」

レイブンは窓の外を見て月を見て目を瞑りながら言つ。

少し場所は変わり夢の中

周りは沢山の木に囲まれ周辺は洞窟の中に居るのでは言つ立の嘘を
だつた。

森の中で其処に住む生物達の声が周りに響き渡る。
だが突然空にヘリの音が聞こえ始める。

「？？？」こんな森林の中でも人の人間を見つけるなんて無理だろう
おっせん？」

黒い髪の青年「赤い髪の若い青年はヘリを操縦しながら隣の黒い髪の中年の
おっちゃんに言ひ。

黒い髪のおっちゃん「無理であらうがあらゆる任務を成功させるのが
我々・・・・・だ。」

それに・・・・・は彼らに渡す物があるらしい

中年のおっちゃんは赤色の若い青年に伝える。

赤い髪の青年ターゲットにか？なるほど不良運搬は何年掛かかるか
わからぬでおっちゃん？」

赤色の若い青年は真剣な表情で言ひ。

黒い髪のおっちゃん「・・・・・管理局の任務とは言え嫌な任務だ」

おっちゃんは窓の外を見ながら少し寂しそうな表情で言ひ。

赤い髪の青年「俺ら下は上の言ひ」とを聞かないと行けないと云
のがアレだな・・・

実験で失敗したとはいえアイツは…良い奴だったのにな」

赤い髪の青年はヘリを操縦しながら地上を見て悲しそうに言ひ。

其処に管理局の局員からヘリに伝？が入ると

？？？「了解現場に向かつ」

ヘリを現場に向けて急ぐ。

場所は変わり森林の中3人の人が居て車を止めて髪の毛がボサボサ

髪の青年は、

一人の黒髪の少年を木の影に隠して髪を撫でていた。

？？？2 「此処を動くなよ・・と言つてもお前は動けないんだな。」

髪の毛がボサボサの黒い髪の青年は少年を見て言つ。

？？？4 「マスター！…管理団員がもうすぐ来ます！…！」

赤い髪の少女は黒い髪の青年に伝える。

？？？3 「教えてくれてありがとう。お前も此処で待機しておけよ」

髪の毛がボサボサの黒い髪の青年は少女に伝えるとゆっくり歩き始める。

赤い髪の少女「マスター私も・・・お・・・と・・・も・・・に・・・」

少女は何かを言おうとした瞬間突然眠気が襲いかかる。

少年「・・・・・？」

少年は小さく呟きボサボサの黒い髪の青年に手を伸ばすがその手が届くことがなかつた。

ボサボサの黒い髪の青年「悪いな・・・」

青年は言つと真つすぐ進むと広い森の広場に出る周りは岩山に囲まれて、人が隠れそうな場所が沢山あつた。

夜空には森の広場には武装ヘリと武装局員、200人近くが包囲をしていた。

「はああ・・・・・自由の代償は高いな

青年は管理局の包囲網を見て咳くと青年の姿が赤い竜の姿になり何かを咳き

管理局の包囲網に一人突撃する。

その所で突然目が覚める。

レイブン「夢を見ていたんだな・・・

目を開けてレイブンは言つ。

そしてトーマ達が起きて外に出る準備をしていた。

いつの間にか服屋の少女が居たがレイブンは気にせずにいた。

トーマ「レイブンどうしたよ?」

荷物を纏めながらトーマに尋ねる。

レイブン「気にしないでくれないかトーマ…少し懐かしい夢を見たんだ

レイブンはトーマに向つとまた円を見ていた。
そして

レイブン「僕は友達ができるよ

そつと部屋を後にする。

10話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

夜方23時52分頃
ルヴェラ鉱山遺跡

？？？「襲撃があったのは昨日の夜。現状施設職員に死亡者はなし、
侵入者は経路の電子錠を警報をならわずに解除しつつ誰にも見つか
らず現場まで、

一直線連中にしては随分とあつたらしくしてシグナムビリ思つ

赤い髪の妖精サイズの少女は尋ねる。

シグナム「そうだな我々の任務はE.C.I兵器保有者の確保だ。
それが誰であるか必要とあらば打ち倒して確保するだけだ。」

シグナムは天井を見てそう少女に言つ。

それから2時間後ルヴェラ丘陵地帯1時25分

トーマ達は休息していた。

レイブンは周りを見ると言つてこの場にはいない。

アイシス「まこーりー野宿もたまになら楽しいよね。
管理局との追いかけっこ込みつていうのもまた面白いし
でなんで5人は追われてんの？」

トーマ「前にも言つたろ心あたりはあるけど間違つた」とはしてな
いつて、「

トーマは木の枝を折りながらアイシスに教える。

アイシス「だからそれを詳しく聞かせてくればいいじゃん！
旅は道連れ世は情け！」

アイシスはジタバタしながら言つ。

一方別の所では激しい戦闘が起きていた。

結界が貼られているので外にはその爆音は聞こえないが、
20分前トーマ達のり少しく遠い所で戦闘が行われていた。

1時5分頃

森の中で何かが突然爆発すると突然木の影から豹型の機械兵器が現れ
小口径2連装レーザー機銃（胸部）と対ゾイド20mm2連装ビーム砲（背部）で、
連續ビームとレーザ射撃を白いティラノサウルスに放つ。
その攻撃を回避しながら白いティラノサウルスバーサークフューラーは背後の川を警戒していた。

バーサークフューラー「川の中に何か居るな？」

川の中に何かの反応が先ほどから反応しているが一向に姿を現さないで気になるが、

今は目の前の敵を倒すことを優先することにした。

バーサークフューラーの周りには無人機の豹型の機械兵器5とベロキラプトルに似た兵器5と、
バッファロー型10がいた。

バーサークフューラー「今日はこの間のり少ないが中型が10体か。
・・・・」

ビームを回避しながらいティラノサウルスは背部に回転して切り裂く爪の基部から、

「なのは」のディバインバスター並のビームをバッファロー型に向けて撃つが
数体のバッファロー型はそれを回避して他のバッファロー型が左右から同時攻撃を仕掛ける。

バッファロー型「・・・・・」

背部（実獣の肩上部分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回せると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

バーサークフューラー「ち」

背部に回転して切り裂く爪から薄い紫色の何かを展開して、攻撃を全て防ぐが動けない所に、

背後の川から待機していたワニ型の無人機が川から突然現れる。

バーサークフューラー「当たるか！！」

バーサークフューラーの脚に顎で噛み突こうとするがバーニアスラスターを吹かして上昇して、

その攻撃を躱してバーニアスラスターを消してワニ型の無人機を顎ごと踏みつぶし

突然バーサークフューラーに赤い光りが周りにまぶしく襲いかかる。

ヘルキャット「・・・・データ習得開始」

小口径2連装レーザー機銃（胸部）と対ゾイド20mm2連装ビーム砲（背部）で、

連續ビームとレーザ射撃を赤い光りの中心にいるバーサークフューラーに放つ。

ベロキラプトル「・・・・・」

口腔内の機関銃を赤い光りの中心にいるバーサークフューラーに放つ。

バッファロー型「・・・・・」

背部（実獣の肩上部分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回せると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

ドゴオオオオオオン！！

という爆発音がバーサークフューラーの中心から聞こえる。だが煙の中から深紅の閃光が現れ一瞬でベロキラプトルの一體を切り裂き

深紅色のバーサークフューラーが現れる。

深紅色のバーサークフューラー「バーサークフューラーブレイカー モード！」

背部のバスタークローバー基部のAN185mmビームキャノンが消えた代わりに背中には、

背部には機動力強化のための深紅の大型可変式スラスター「ウイングスラスター」が搭載され、

その両側にはEシールド以上の防御力を発揮する特殊チタン合金製の深紅の盾「フリーラウンドシールド」との中には中型ゾイドを一撃で両断する力を持つレーザー刃「エクスブレイカー」が装備された。

その姿を見たバッファロー型とベロキラプトルは深紅色のバーサクフューラー包囲して、

同時攻撃を開始する。

バッファロー型「・・・・・」

背部（実獣の肩上部分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回せると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

深紅色のバーサークフューラー「もうその攻撃は聞かない」
殊チタン合金製の深紅の盾「フリーラウンドシールド」から薄い紫色の何かを展開して、

攻撃を全て受け解除して頭部から尾部までが一直線になり、尾部の放熱フインを展開し脚部のアンカーを下ろして、口にはすでに黄色いエネルギーが集まりそれを口部から発射すると同時に脚部のアンカーを、

少しづつ動かし回転しながら強力な黄色いエネルギーの砲撃を放つてている。

ドゴオオオオオオオオオオオオ

と爆発音が周りに響きたの場所に一体だけバーサークフューラーだけが残つた。

バーサークフューラー「はあはあ・・・」

深紅の姿から元に戻り解除してバーサークフューラーの主レイブンは木を歩く支えにしながら、ゆっくりトーマ達の所に向かう。

それから30分後

1時35分頃トーマ達の方もアイシスとの会話が終わり。リリィとアイシスとシャドーは寝ていた。シャドーだけは寝たふりだがまあ誰も気付いていないので一人を見ていた。

ステイード「今回のこれはこの旅を終りにする良いきっかけかもしれませんねトーマ」

ステイードはトーマを見て教える。

トーマ「探し物も行き方を決めるのも途中で終わらせるのは嫌だよ俺は

トーマはステイードに向かって

ステイード「生き方は何処でも見つけられますよトーマ

ステイードはトーマを見て伝える。

トーマ「何度も言つたろきつかけが欲しんだ。あの町が砕けて俺も死にかけて、

俺の大事なものが全部壊された。
ヴァイゼン遺跡の鉱山のこと・・・あの時あの場に居た多分町を壊した誰か、

もう7年の前の公式記録で事故つて断定されてることだ。
犯人なんかいなくてホントにじこだつたのかもしれないしだけどそ
うじやないかもしれない。

俺は本当のことを知りたいのか知りたくないのか昔のことを全部忘
れていののかどうか、

探してるのは踏ん切りをつけるきっかけを半年間の時間を決めて探
すだけ探して、
それで見つかならなかつたら諦める。」

トーマはステイードに言つと草むらがガサガサといつ音がすると、
レイブンが出てくる。

トーマ「お帰りレイブン随分遠くまで見周りじき苦労させ

トーマはスポーツリンクを渡して言つ。

レイブン「ありがとうトーマ」

スポーツリンクを受け取りゆつくり飲見ながら言つ。

ステイード「少しあたりを見回つてきます。貴方達を休んでくださいね。」

ステイードは言つとゆつくり見周りに行く。

トーマ&レイブン「ああ」

二人は同時に頷き寝る準備に入る。

トーマ「・・・ごめん変な話を聞かせちゃったか」

トーマは落ち込んだ表情で寝ている4人に言つ

リリイ「ううん寝ていたから聞いていいなよ」

リリイはトーマに精神念話で言つ。

アイシス「あたしも
シャドー」「へいじぐ

二人は同時に言つ。

トーマ「そうでもまありがとう」

トーマはまくと寝る準備に入る。

それから5時間後にしてトーマ達は起きて歩き始め2時間後教会に辿り着く。

その場所でこれからトーマ達と彼との初めての接触

1-1話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

ゾイド紹介2（前書き）

前回に出たゾイド紹介

ゾイド紹介2

力ノンフォート	カノンフォート
分類	バッファロー型
重装強行攻撃型	重装強行攻撃型
全長	14.8m
全高	6.8m
全幅	5.3m
重量	55.0t
最高速度	190.0km/h
武装	武装
装備	ビームホーン×2
重撃砲	重撃砲×2
4連速射砲	4連速射砲
二連ガンランチャー	二連ガンランチャー
ジャミングテイル	ジャミングテイル

第一次大陸間戦争時代、ヘリック共和国軍が来るべき暗黒大陸上陸作戦のために開発したバッファロー型突撃戦用ゾイド。小型ディバイソンとも言うべき機体で、背部に強力な重撃砲を装備し、角もビーム砲となっている。胸部は格納庫になつており、弾薬など物資を積むことが可能。尾は妨害電波を発することが出来る。

新ゾイドバトルストーリー掲載の第一次暗黒大陸上陸作戦から実戦投入されたが、配備直後から最弱機（旧シリーズ最後のゼンマイ駆動ゾイド）としてダークホーンのハイブリッドバルカン砲に2台同時に貫かれたり、ロジャース少佐率いるカノンフォート部隊が暗黒大陸の共和国軍前線基地でジーク・ドーベル、ガル・タイガーを中心とした高速部隊とギル・ベイダーに襲われて全滅するなど損な役

回りをさせられている。そういうた損傷とZAC2056年の惑星Z-i大異変で多くのゾイド同様、個体数が激減し第一線から退いたが、生き残りが第一次大陸間戦争の暗黒大陸（ニクス大陸）での戦いに投入された（ゾイド公式ファンブック4巻参照）。

バリゲーター

分類	ワニ型
全長	14.5m
全高	4.4m
全幅	4m
重量	24.3t
最高速度	陸上 150km/h
水上	35kt

武装

（新） バイトファング
AMD20mmビーム砲 × 2
地対空4連装ミサイル
スマッシュアップテイル

央大陸戦争時代に開発された、ヘリック共和国軍のワニ型水陸両用ゾイド。ZAC2031年のフロレスオ海海戦にて初登場。同時期に開発された海空両用ゾイドEMZ-19 シンカーには後れを取つたものの、旧式化したRMZ-05 アクアドンに替わって共和国海軍兵力の一翼を担つた。

ZAC2056年の惑星Z-i大異変後も生き残り、その後もRZ-037 ウルトラザウルスやRZ-033 ハンマーHEADが登場するまで共和国軍唯一の海軍兵力だった。

バイトファングの威力は凄まじく、噛み付いて河川に引きずりこむ戦法を得意としている。帝国の主力海軍戦力であるブラキオスとは

中央大陸戦争時代は互角とされたが、
大陸戦争以降は不利とされる。
プラキオスが強化された西方

ソイド紹介2（後書き）

次回もよろしくお願いされます

トーマ「あー見えた見えた

トーマは坂の上から教会が見える位置で立つ。

アイシス「ほんとだ聖王教会の建物はこの世界でもかわらないね
え」

アイシスは教会を見ながらアイシスに向かう。

トーマ「やうだな・・・・・・

トーマは教会を見ながらアイシスに返答する。

アイシス「・・・あれ?」

トーマ『この臭い火薬と血の

トーマ「スティード監督大臣

トーマは異常に気付きスティードに立つ

スティード「ハイ!」

アイシス「え!..」

トーマ「俺中の様子を見てくる。此処からなるべく離れてて

トーマは言つと急いで坂から降りて走つて教会の扉を開けると
教会の中は血と壁に付いた獣の爪で切り裂かれた跡とドアの破損が
目立つっていた。

トーマ「これは……シスター」

トーマは床に倒れている息絶えたシスターを見て悲しい表情になると
「？？？」
「来るのが遅えよおかげでこんな胸糞悪い場所で、
いらねえ殺しをするハメんなった。
いいか坊主用件は一つだけだテメエが盗み出した『ティバイダー』ヒリ
アクター、
両方纏めてこいつに寄越せガキの玩具にやすぎた品だ。
死にたくなきやあせりと寄越せ」
「せ

左手首に藍色の羽根のタトゥーをしてこの身長一八〇センチの男は
トーマだ。

トーマ『藍色の羽俺がずっと探していた。』

トーマは男を見て心の中で呟く。

『セーツトマーップ』

トーマは『ティバイダー』を展開し構える。

トーマ「聞きたことがある。『』をこんな風にしたのとシスター
達を殺したのは、
アンタか」

トーマは左手首に藍色の羽根のタトゥーをしている身長一八〇センチの男に質問する。

？？？「あん？」

左手首に藍色の羽根のタトゥーをしている身長一八〇センチの男は機嫌が悪そうに、

トーマを鋭い目で睨みつける。

トーマ「7年前に、ヴァイゼン鉱山を壊したのもアンタなのか！」

トーマは大きな声で質問すると左手首に藍色の羽根のタトゥーをしてくる。

身長一八〇センチの男は突然ガンソードをトーマに向ける。

？？？「テメエな質問してんのはじつちだ・・・死ねクソカス」

身長一八〇センチの男はガンソードを発砲する。

ド「オッ」という爆発音が周りに響き教会内も揺れて煙も発生していた。

トーマはいつの間にか男の右側に周り煙の中から出てきて、ディバイダー996を斜めに薙ぎ払う。

？？？「オラアーーー」

男は、ダンと飛んでトーマの斬撃を回避した後ガンソードを縦に振り下ろす。

トーマ「ハアアアアア！」

トーマも男と同時に「ディバイダー996」を縦に振り下ろす。

ギリギリといふ音と共に二人は同時に離れると同時にガンソードを向ける。

「ガンソード」「フレッシュショル

男が持っているガンソードがそうして銃身部の周囲に生み出したエネルギー弾が現れる。

「ディバイダー996」「シルバーバレット」

トーマの「ディバイダー996」が言つて瞬間に環状魔法陣を伴ってエネルギーが集まり、エネルギー弾がお互いに同時に発射をする。

ズドォオッと音がなると同時にトーマと男の後ろ側は激しい砂煙で覆われる。

？？？「ハッハア！－」コイツア面白れえ！ただのガキじやあねえってか？

聞かせてみなソイツを連中から盗んだ理由は何だ？」

男はトーマに尋ねる。

トーマ「別に欲しくて盗んだわけじゃない。女の子を助けたらコイツが、勝手についてきただけだ。」

トーマは「ディバイダー996を見せながら男に答える。

？？？」「女…………？シユトロゼックの事か？」

男はトーマに聞く。

トーマ「せう名乗った」

トーマは男に言つ。

？？？「クク…………ハハハ…………そつかいそつかい」

男はニゴニゴ可笑しそうに笑う。

トーマ「何がおかしい……！」

トーマは男に向かつて叫ぶ。

？？？「知らねえってのは面白れえもんだ。

テメエが手にしてるソイツが一体どんなシロモノなのか、それも知らねえでその部品を助けた！！

はあッはッはッはあ！！凄いなどんだ馬鹿ガキだ。」

男は可笑しそうに笑つている。

トーマ「笑うな俺は質問に答えた。今度はあんたが答える。
7年前のヴァイゼン鉱山だ」

トーマは鋭い目つきで怒りの表情で男を見て大きな声で言つ。

？？？「聞こえねえな

男は言つと銃口をトーマに向けながら男は言つ。

ド、ドオンといつ爆音と共に周りに響くと同時にトーマの皿の前が、爆炎で見えなくなつて砂煙が起ると同時に風が巻き起つ。

トーマ「こんな炎と嵐で俺の故郷を壊したのはあんた達か」

トーマは鋭い眼光で男を睨みながら質問する。

？？？「聞きてえか？…そつだひつそつだひつなあー。」

男はトーマを見ながら叫ぶ。

トーマ達の戦いが2回目が始まった瞬間外にもリリイ達に黒い影が迫っていた。

1-2話（後書き）

今回はトーマが主に大活躍次回は主に敵が馬鹿みたいに出て来ます
トーマ達の運命は

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9155r/>

魔法戦記リリカルなのはForce白き魔装竜

2012年1月14日21時55分発行